



TITLE:

元代河東鹽池神廟碑研究序説

AUTHOR(S):

古松, 崇志

CITATION:

古松, 崇志. 元代河東鹽池神廟碑研究序説. 東方學報 2000, 72: 347-379

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66824>

RIGHT:

元代河東鹽池神廟碑研究序說

古 松 崇 志

はじめに	三四七
一 碑文の録文と釋讀案	三四九
(一) 「解鹽司新修鹽池神廟碑」	三四九
(a) 李庭撰碑陽の録文	三四九
(b) 陳元忠撰碑陰「建置鹽司歷年增課記」の録文と釋讀案	三五二
(二) 「大元敕旨重修鹽池神廟碑」	三五八
至元二十七年建立「解鹽司新修鹽池神廟碑」の若干の検討	三六三
(一) 鹽司・鹽場の移轉問題	三六三
(二) 立碑の立場と背景	三六九
おわりに	三七五

はじめに

山西省南西部にある鹽池は、華北内陸部における鹽の一大生産地として古來より名高く、中國歷代王朝に重視されてきた。特に唐代後半以後、鹽の專賣が導入され、その國家財政に占める比重が高まるとともに、鹽池における鹽の專賣收益は、國家の存立にとって、相當に大きな意味を持つようになる。こうした國家との關係の深まりと軌を一にして、それまで民間の信仰を集めていた鹽の生産を守護する神々を祀った鹽池神廟が、唐代後半の大曆年間に國家によって初めて創建

された。以後、宋・金・元・明・清と、歴代王朝のもとで、國家の手による祭祀が連綿と受け継がれていくことになる。

この鹽池神廟は現在の山西省運城市に位置している。鹽池をはさんで向かい側には中條山を臨み、鹽池を一望に見渡すことのできる小高い丘の上にある廟内には、元代から民國期に至るまでの數多くの石碑が現存する。鹽池神廟の現状については、一九九一年に當地を訪れた妹尾達彦氏による報告があり、石碑の現況についても觸れられている。¹⁾

一方、戦前の鹽池神廟に關しては、昭和十四年（一九三九）に當地を訪れた中谷英雄氏による見學記と石碑の紹介があり、當時石碑がどのように配置されていたかが細かく記されている。²⁾ また、水野清一・日比野丈夫兩氏の『山西古蹟志』にもかなり詳細な記録がある。これは、日中戦争のさなか昭和十五年（一九四〇）十二月から翌年正月にかけて行われた山西省南部の古蹟の調査報告であるが、後に古蹟の多くが破壊され失われてしまった以上、この調査報告の持つ學術的價值は高い。³⁾ この學術調査が行われた際に、拓工に依頼して鹽池神廟内の多くの石碑から拓本が採られた。この時將來された拓本は京都大學人文科學研究所に收藏されており、その拓本目録たる「鹽池神廟碑目」が『山西古蹟志』中に掲載されている。⁴⁾

本稿では、京都大學人文科學研究所に所藏される一連の鹽池神廟の石刻拓本のうち、時代狀況の轉換期となる元代に關するものを取り上げるが、これらの碑文の内容をおおまかに検討したところ、『元史』をはじめとする既知の典籍史料からはいかがい知ることのできない様々な歴史事實を浮かび上がらせることのできる貴重な史料であることが判明した。ただし、今のところモンゴル時代史の知見を十分に持たない筆者は、この魅力ある材料を消化し、歴史像を構築していく段階にはまだ至っていない。そこで本稿では、まずは史料紹介の意味をこめて、至元二十七年（一二九〇）建立の「解鹽司新修鹽池神廟碑」（以下「新修碑」と略稱）と延祐元年（一三二四）撰文・至治元年（一三二一）建立の「大元敕旨重修鹽池神廟碑」（以下「重修碑」と略稱）の二つの碑文について、合計六枚の拓影を掲載したうえで録文を採録し、廣汎な

研究に資することを期したい。碑文の内容検討をめぐっては、さしあたり「新修碑」について碑陰を中心に重要な一部分のみを取り上げ、現段階において明らかにしたことを報告するにとどめる。これらの碑からは多方面にわたる様々な事柄が導き出されるが、紙幅の限りもあり、それらはいずれも今後に期することを預めお断りしておきたい。

一 碑文の録文と釋讀案

(一) 「解鹽司新修鹽池神廟碑」

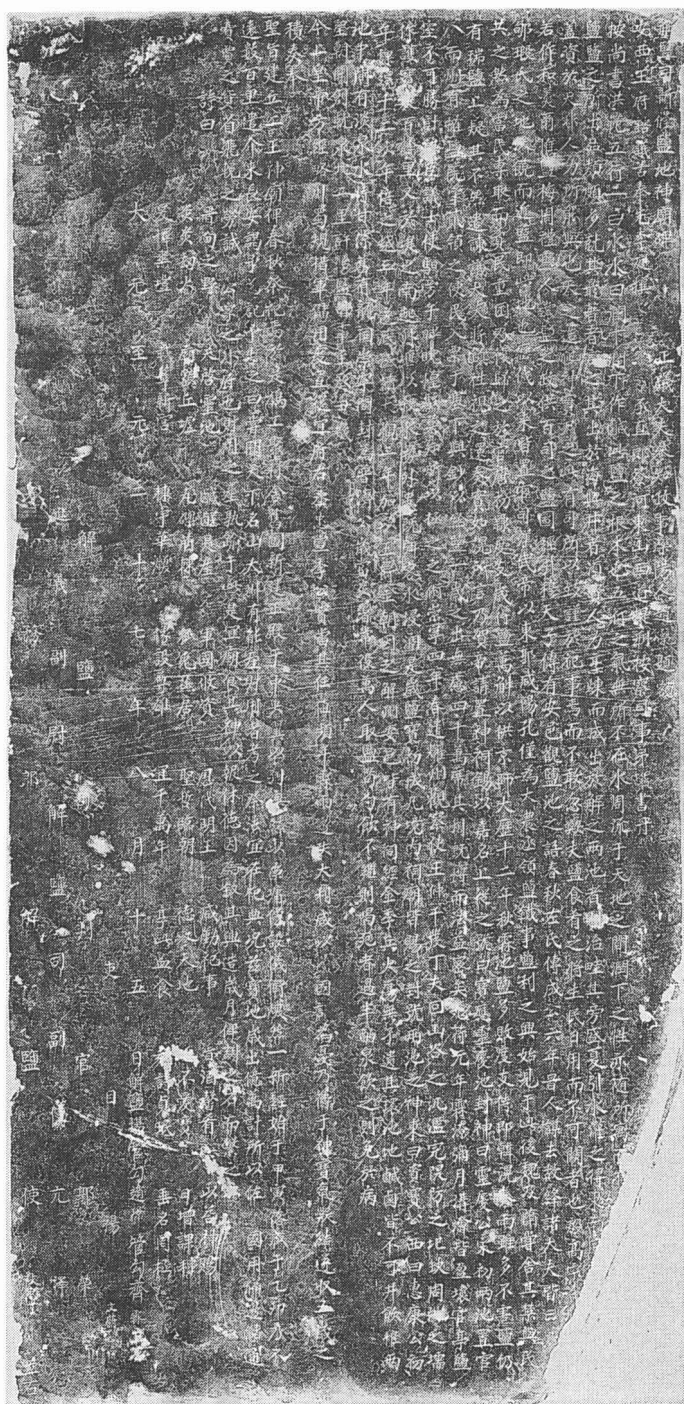
李庭撰「解鹽新修鹽池神廟碑」を碑陽に持つ至元二十七年八月に立てられた石碑は、妹尾氏の報告によれば、一九九一年の時點では碑閣跡地の西側に置かれていた。ところが、最近鹽池廟を訪れた方からのご教示によると、鹽池神廟には存在しなかったとされており、現在の所在は不明のようである。碑陽については、李庭の別集『寓庵集』（『藕香零拾』本）卷七、清・胡聘之『山右石刻叢編』卷二七に著録される。一方、碑陰「建置鹽司歷年增課記」については、管見の限りこれまで石刻書や地方志などに著録されたものはなく、從來その内容は知られていない。ここでは、碑陽については拓本によって録文を載せ、破損部分を、『寓庵集』によって補い碑文を復元する。また、碑陰については、拓本に基づき録文を採録するとともに、新史料であることにかんがみて釋讀を試みる。

(a) 李庭撰碑陽「解鹽司新修鹽池神廟碑」の録文

□で囲んだ部分が『寓庵集』により補ったところである。

解鹽司新修鹽池神廟碑

正議大夫參知政事灤陽人趙榮題額



圖版 1 「解鹽司新修鹽池神廟碑」碑陽
(88cm×183cm)

安西王府諮議古奉先李庭撰

承直郎簽河東山西道提刑按察司事弟仁軌書丹

按尙書洪範、五行一曰水、水曰潤下、潤下作鹹。此鹽之根本也。五行之氣、無所不在、水周流于天地之間、潤下之性、亦隨所寓而有焉。其味作鹹、凝而爲鹽。鹽之所出、品類頗多、就其最著者言之、其出於海與井者、須資人力、烹煉而成。出於解之兩池者、則治畦其旁、盛夏引水灌之、得東南風起、一夕成鹽。／蓋資於天、非人力所能與也。天之造化、神實尸之、此有司所以致謹於祀事焉、而不敢忽歟。夫鹽食肴之將、生民日用而不可闕者也。殷高宗命傅說曰、／若作和羹、爾惟

鹽梅。周禮鹽人、掌鹽之政、供百司之鹽。圖經引穆天子傳、有安邑觀鹽池之語。春秋左氏傳成公六年、晉人謀去故絳、諸大夫皆曰必囿郇瑕氏之地、沃饒而近鹽。卽此地也。歷代以來、皆置官司、漢武帝以東郭咸陽·孔僅爲大農丞、領鹽鐵事、鹽利之興、始見于此。後魏及隋嘗舍其禁、與民／共之、然爲富民專取、而貧民重困、乃復歸之於官。唐初隸度支、歲得鹽萬斛、以供京師。大歷十二年、秋霖池鹽多敗、度支侍郎韓滉奏、雨雖多不害鹽、仍／有瑞鹽。上疑其不然、遣諫議大夫蔣鎮往視之、還奏、實如滉所言。乃賀帝、請置神祠、錫以嘉名。上從之、號曰寶應靈慶池、封神曰靈慶公。宋初、兩池置官／八、而州有權鹽院、守貳領之、使民入粟于塞下、與鈔以給鹽、一歲之出、無慮四十萬席、其利既博而法益密矣。元符元年、霖潦彌月、溝澮皆盈、壞官亭鹽／室、不可勝計。講臣·議士、使駟旁午、睥睨惶駭、莫知所以拯之之術。崇寧四年春、遣耀州觀察使王仲千、發丁夫、回山谷之汎濫、完隄防之圯缺、周池之壩、／作護寶堤百餘里、又於堤之南起外堰、以殺水勢。外患旣弭、客水浸涸、是歲鹽寶初成、凡境內祠廟、皆賜之封號。兩池之神、東曰資寶公、西曰惠康公。初／年課纔十二、次年倍之、越三年遂底成績。大觀二年、加以王爵。金朝因之。解州·安邑皆有神祠、經金季兵火、蕩無孑遺。其環池地鹹鹵、皆不可井飲。惟兩／池中閒有淡泉、水特甘涼。舊有龍祠、崇寧閒、封爲普濟公。歲當炎暑、常役萬人取鹽、苟勺飲不繼、則暍死者過半、酌泉飲之、則免於病。／

聖朝開創、就泉北二里許治鹽司事。至癸丑歲、／

今上皇帝方經略川蜀、規措軍儲用度、置從宜府、右丞忠宣李公實當其任。值頻年霖雨、遂失大利、咸以 國計爲憂、乃禱于神、寶氣凝結、遂收五歲之／積。奏奉／

聖旨、建立二王神廟、俾春秋祭祀焉。於是鳩工聚材、舍舊圖新、建正殿于中央、翼以列廡、繚以崇墉、像設儀衛、煥然一新。經始于甲寅、落成于乙卯。乃不／遠數百里、遣介來長安、謁予爲記。予告之曰、嘗聞天下名山大川、有能產財用者、考之祭法、宜在祀典。況茲寶池、歲出億萬計、所以佐 國用、備邊儲、通／賣買之貨、省飛輓之勞、誠 公家之外府也。

財用之產、孰踰于此。是宜廟食其神、以報休德、因爲敘其興造歲月、俾刻之石。而繫之以／
詩曰、晉甸之野、天啓靈池。鹹鹺是產、軍國攸資。歷代明王、咸勤祀事。旨酒馨肴、以答神賜。／炎炎劫火、廟貌丘墟。
瓦礫荆棘、狐兔燕居。聖哲臨朝、德參天地。地不愛寶、日增課利。／爰擇爽塏、載葺新宮。棟宇華煥、像設尊雄。宜千萬
年、享此血食。刻詩貞珉、垂名罔極。

大元至元二十七年八月十五日解鹽場管勾趙環 管勾齊霖

吏目楊文蔚

解鹽司判官郭榮

進義副尉解鹽司副使亢澤

承務郎解鹽使陝思丁立石

(b) 陳元忠撰碑陰「建置鹽司歷年增課記」の錄文と釋讀案

(錄文)

建置鹽司歷年增課記

平陽路詞賦進士陳元忠撰并書

維大元開創、以神武定天下、財賦之事尙未遑焉。／

烈祖皇帝御極大承、相耶律公領中書省、于時妙選士人之廉幹者、咸薦諸／

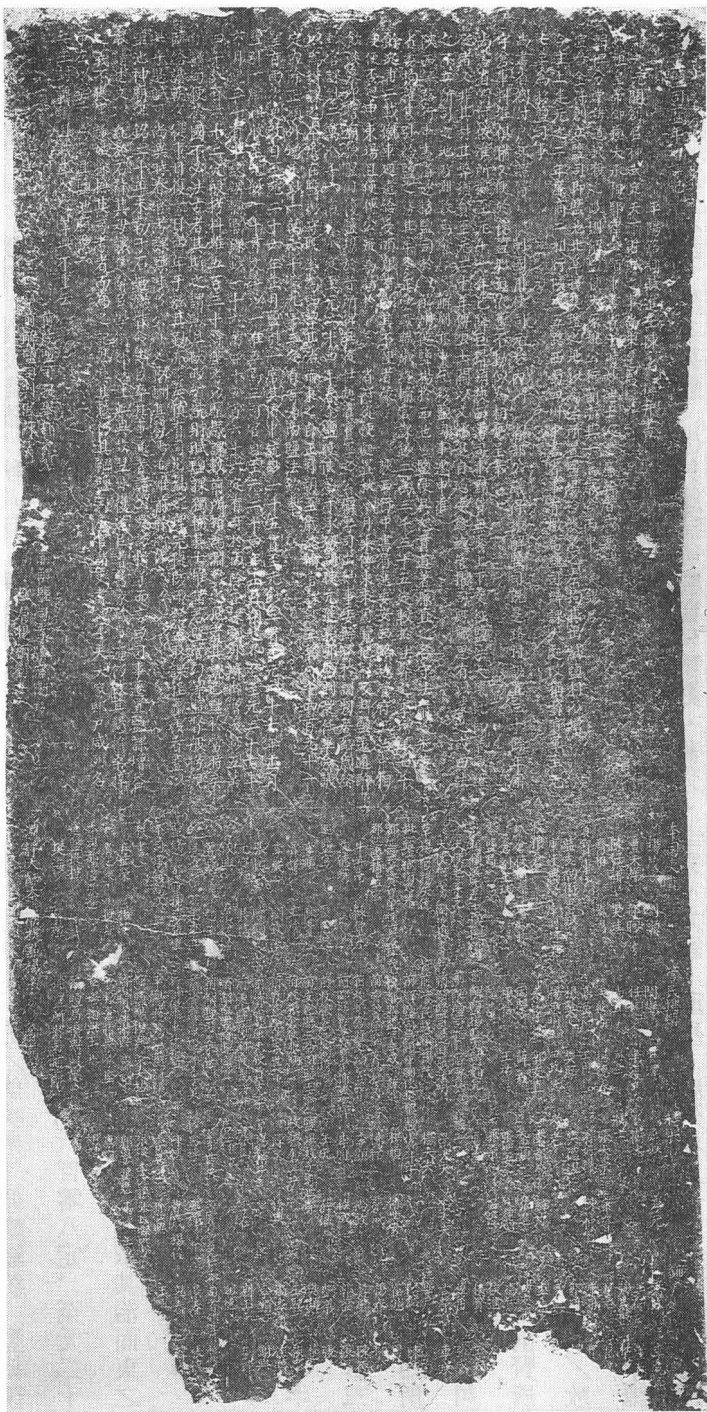
朝、俾分掌諸道錢穀之政、則解鹽使太原姚公行簡亦其一焉。歲舍丙申 錫以／

宣命金符、創立鹽司、卽鹽池北阜、擇爽塏之地、以爲治所、置鹽場於啖泉之左、拘其出納、鹽利乃增。／

今主上建元之二年、廉商二相行陝西五路西蜀四川中書省事、有檄爲鹽司辦課大處、改稱資寶軍。至元／七年、爲移鹽司事、／

尙書省劄付、戶部照得、制國用使司元卷內、省部公議得、據解鹽司、既是路村設置三十餘年、廨／宇・倉庫・料堆俱備、又便於食鹽地面、依舊不動、似爲相應。呈奉

尙書省劄付、依准所擬。至元十一年已降、巨猾領陝西漕司事、贖貨無贐、上下交征、鹽法大壞。旣卽梟夷、繼之／者、又



圖版 2 「解鹽司新修鹽池神廟碑」碑陰「建置鹽司歷年增課記」
(90cm×183cm)

非其材、其弊猶貪。至元二十年、傅公士開以文儒進、自延安路總管擢司厥職、思有以革之。或曰、法／之不立、所司之地乃淵藪焉。會 解州亦申乞移鹽司事、遽申准／

陝西等路行中書省、遂移鹽司於 解州、徙鹽場於西池。鹽使吳恕貫道、著廉直之名、守法嚴峻、先蒙／

省委拘權售引、給鹽之務。其年冬、正受厥職、歲終輸官課鈔二萬三千三十五定、較於法弊之季、增羨七千／餘定。甫二載、僦車廻遠、給受頗艱、有訟其不便者。蒙

陝西行中書省選委、安西路總管府王治中相／度便否、廻申東場且便。傅公疑焉、請於 省府、從便處置。秋八月、乘傳東來、周覽地形、及料鹽遠邇、酌／飲啖泉、仰瞻廟貌、翌日復鹽場於昔

所。俾吳從仕處資寶軍之公廨、專司出納事、委餘務於副判居解。歲終／輸官課鈔二萬八千六百零八定。至元二十四年春、今鹽使陝思丁承務、副使亢進義、郭鹽判受任畢、僉議／以爲、辦課之本、悉在鹽場、守此奚爲、即挈其治而東之。自正月朔至歲終、輸官課鈔三萬八千四百九十一／定、內除正額外、增羨鈔一萬六千零九十三定有奇。治內鹽法、欽奉

聖旨、兩次更改、自至元二十六年正月、鹽引一席、其價中統鈔一十五貫。至元二十六年十一月、／鹽引一席、俱收至元鈔一十貫文、率以一准五焉。三司官、自至元二十四年正月朔起界、至至元二十七年／六月中、三年有半、總辦輸官課鈔一十六萬四千五百六十六定有奇、於內除正課額外、辦出增羨鈔五萬／四千八百六十二定、般撈料堆五百三十餘座。

考以歷歲課數、前所損爲淵藪之地者、其說已黜於當時矣。／所謂苟便於國、不必法古者、其斯之謂歟。且陝西所統財賦、鹽課獨輸其七。惟諸君暨管勾等、監督般撈、親／臨給請、朝夕從事、日復一日、四年于茲、其勤亦至矣。慎有司出納之理、完堤防而絕盜取。課程贏羨者、蓋以／此乎。是誠可尙、異時春官考課、黜陟以公、亦足以酬其勞焉。追惟前賢所作／

鹽池神廟碑銘、二十年未勒于石、廼鳩貲命工、以卒其事。邇者諸公見訪揖予而言曰、司事遷置、鹽課增益、／敢請述文以紀於石背、其毋讓。僕辭以學術鄙陋、且無典故、翌日復送以耆舊家藏事迹、仍致其懇。惟桑梓／之義、不獲牢謙。姑採摭其可考者、而爲之記、然其甚慙。仍具解鹽司屬官、諸吏、耆艾、士夫、大家、邸戶、咸列名／于左、以垂不朽焉。其鹽池

廟貌・／

二王封爵、則具載李公之筆、此不重云。

(釋讀案)

大元は國を開創するや、(初代チンギスの)すぐれた武徳でもって天下を定めたが、財賦のことに及ぶ餘裕はまだなかった。烈祖皇帝(第二代オゴデイ)が繼承されると、耶律楚材を相として中書省を領させ、士人の清廉で才幹ある者を念入りに選び、ことごとく朝廷に推薦し、諸道の徵稅財務關係の職務を分掌させたのであったが、解鹽使の太原の姚行簡もまた、その一人であった。歳やどること丙申(一二三六)、宣命・金符を授けられて鹽司を創立した。鹽池の北にある丘の高燥ですがすがしい地を選んで治所をつくり、鹽場を啖泉の東に置き、その出納を管理したので、かくして鹽利は増えた。

今上皇帝(クビライ)の建元の二年(中統二年(一二六一))に、廉希憲・商挺の二相が、行陝西五路西蜀四川中書省事となつたときに、檄文があつて、鹽司は課額を取りさばくこと大であるところなので、資寶軍と改稱した。

至元七年(一二七〇)には、鹽司を移すことのために、尙書省の劄付を下し、戸部が調べたところ、制國用使司の元卷のなかに(云々とあり)、尙書省戸部で協議したところ、解鹽司については、路村に設置して三十餘年がたち、役所建物・倉庫・鹽集積場がすべて備わっており、さらに鹽を消費する地域にも便利であるからには、今までどおり動かさないのが相應のようである。(戸部が)呈文を送つて奉じた尙書省の劄付には、「(戸部の)原案に依れ」とあつた。

至元十一年(一二七四)以後、大惡人(郭琮)が陝西轉運使司を統べて、財貨をけがして飽くことがなく、上のもものもだれもが取り立てを行つたので、鹽法は大いに壞れてしまった。そういうことがあつてからただちに(郭琮は)誅殺されたが、その後を繼いだ者も適任ではなく、その弊害はなおも甚しかった。

至元二十年(一二八三)には、傅士開がすぐれた儒者であることによつて昇進せられ、延安路總管から拔擢されて陝西都

轉運司の職をつかさどることになり、鹽法を改革しようと考えた。法が立たないのは、役所の地が（盜賊の）淵藪にあるからだ、というものがいた。おりしも、解州もまた上申して鹽司を移すことを乞うたので、すみやかに申文を送って陝西等路行中書省（の命）をうけ、結局鹽司を解州に、鹽場を西池に移すことになった。

鹽使の吳恕（貫道）は、廉直であることで名高く、法を守ること厳しく、以前に行中書省の委任をうけて、鹽引の販賣・鹽の支給といった職務を管理した。その年（至元二十年）の冬に、ちょうどその職を受け、歳終までに官におさめられた課鈔は二萬三千三十五定であり、法のやぶれていた時期に比べると、七千餘定の増額であった。

はじめの二年間、車を雇うにははるかに遠く、（鹽の）受け取りはたいへん困難だったので、その不便を訴える者があつた。陝西行中書省の選任をうけて、安西路總管府治中の王が便否を見きわめ、回答の申文には、東場がさしあたり便である、とあつた。傅士開はこれを疑って、陝西行中書省にしかるべく處置することの許しを願つた。秋八月に、（傅士開が）驛傳に乗り東へとやってきて、地形を見渡し、鹽運の遠近をはかり、啖泉を酌んで飲み、廟のすがたを仰ぎ見たうえで、翌日には鹽場を昔の場所に戻すことにした。從仕郎（文資品…從七品）の吳に資寶軍の役所建物に居させて、もっぱら出納のことをつかさどらせ、残りのしごとは副使と判官に任せて解州に居させた。歳終に、官におさめられた課鈔は二萬八千六百八定であつた。

至元二十四年（一二八七）春、今の鹽使の承務郎（文資品…從六品）陝思丁・副使の進義副尉（武資品…從八品）亢澤・判官郭榮が任命されおわって、ともに議論して、課額を取りさばく根本は、すべて鹽場に在るのだから、ここ（解州）にいてもどうにもならない、と考え、そこですぐにその治所を引き連れて東へ移すことにした。正月朔日から歳終まで、官におさめられた課鈔は三萬八千四百九十一定であり、そのうち正額をのぞくと、増羨した鈔は一萬六千九十三定あまりであつた。

治所の内の鹽法は、飲んでいただいた聖旨によって、二度改められた。至元二十六年（一二八九）正月に、鹽引一席の

價格は、中統鈔十五貫・至元鈔三貫となった。至元二十六年十一月には、鹽引一席に對し、すべて至元鈔十貫を收めることになった。至元鈔一に對し中統鈔五に換算される。三人の鹽司の官は、至元二十四年（一二八七）正月朔日から任期が始まって、至元二十七年六月中に至るまでの三年半のあいだで、すべてとりしきって官におさめられた課鈔は、十六萬四千五百六十六定餘りで、そのうち本來の課額のほか、増羨の鈔五萬四千八百六十二定をかせぎ出し、料堆五百三十座餘りを搬出した。

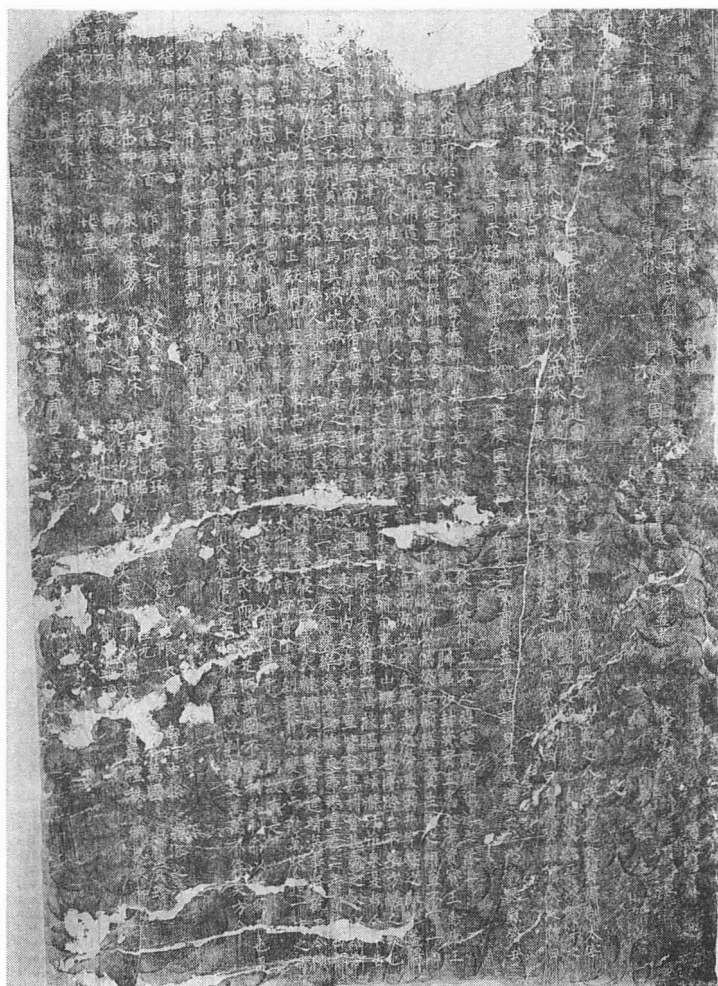
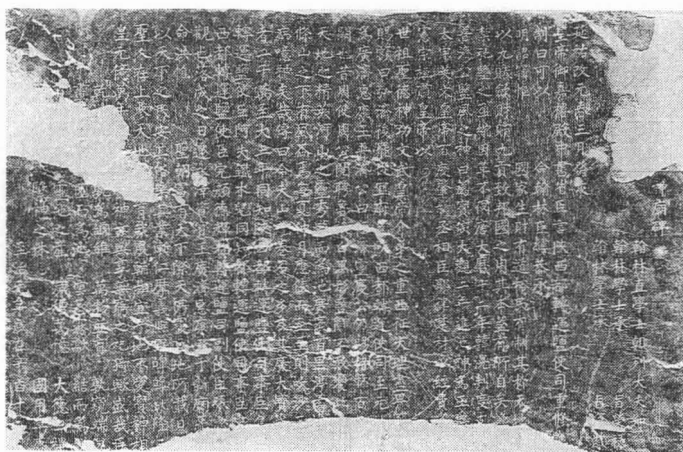
歷年の課額を考えると、以前に課額が損なわれたのは淵藪の地であるからだとする者がいたが、その説はすでに即時にしりぞけられた。いわゆる、「かりにも國に便であるならば、必ずしも古に法る必要はない」というのは、まさにこのことを言うのである。そもそも、陝西で統べる財賦は、鹽課だけでその七割をまかなっている。おもうに諸君や管勾官などは、鹽の搬出を監督し、みずから受給に臨み、朝から夕まで従事すること、日また一日にして、ここまで四年、その勤勉なることはこのうえない。擔當の役人がきちんと出納するよう目を配り、堤防をしつかりと守って盜取を絶やしている。課額の餘剰は、おもうにこのおかげである。このことは本當にたつとぶべきことであり、後日の春官（天官||吏部の誤り）の考課において、人事評價を公平にすればその勞に酬いることになる。

振り返っておもみるに、前賢（||李庭）の著作にかかる鹽池神廟碑銘は、二十年來未だに石に刻していなかったで、資金を集めて工匠に命じて、そのことをなし遂げさせた。ちかごろ、諸公がお見えになって私にへりくだっていわれるには、「鹽司の移轉、鹽課の増益について、文を作つて石碑の背面に記していただくようお願いいたします。辭退はなされぬな。」と。私は學識がいやしく、そのうえ典故にも疎いので、辭退させていたが、翌日には再び耆舊の家藏する記録を送つてきて、かさねがさね懇請された。おもうに故郷の義理を、固辭することはできない。とりあえずそのうちの使えるものを拾いあげて、この記を作つたが、慙愧に堪えない。なお、解鹽司の屬官・諸吏・耆艾・士夫・大家・邸戸

を具え、ことごとく名を左に並べ、不朽の名を残す。鹽池の廟の姿や二王の封爵については、李庭どのの筆によってもなく述べられているので、重ねて述べることはしない。

(二) 「大元敕賜重修鹽池神廟碑」

至治元年立碑の「重修碑」は、高さ三メートルを超える巨碑で、正殿前に「河東運司重修鹽池神廟碑記」という明代の石碑と東西に對になって立っている碑である。^⑤美しい文様をほどこした立派な碑額と巨大な龜趺を持っており、鹽池神廟内の石碑の中でもその偉容を誇っている。京都大學人文科學研究所所藏の本碑拓本をみると、碑の上部で眞横に破損しており、拓本は碑陽・碑陰ともに二枚ずつに分かれている。そして、破損部に読みとれない文字が毎行いくつもあることが分かる(圖版3、4)。胡聘之『山右石刻叢編』卷三二には、本碑文を著録しているが、これまた基ついた碑自體に缺損があった。按語によると「舊通志」には全文が載せられているとあり、これに基づいて破損部を録文中で補っているようである。『山右石刻叢編』と人文科學研究所所藏拓本双方の缺けている部分を見比べると、ほぼ一致する。本碑は清末には破損していたことが分かる。一方、『山右石刻叢編』が参照した「舊通志」とは、康熙年間に編纂された『山西通志』三二卷(康熙二十一年(一六八二)刻本)を指す。その卷三二に「王緯鹽池神廟記」として著録される碑文には、缺損は全くみられない。つまり、本碑は十七世紀後半の清初にはまだ完全な形で残っていたことを知りうる。『山右石刻叢編』はこれによって缺損部分を補ったわけだが、誤りが夥しく問題が多い。『(康熙)山西通志』の録文を拓本と比較したところ、多少の誤字はあるものの毎行の字數も揃い、かなり信頼するに足る著録であることが判明した。そこで、ここでは拓本を基本にして、『(康熙)山西通志』によって缺損部を補い、碑文の復元を行った。それが次の録文である。碑陰については、拓本圖版を参照されたい。^⑥なお、本碑右側には碑側が存在し、「般運助工人」・「解鹽攢典」のリストが載せられてい



圖版3 「大元敕賜重修鹽池神廟碑」碑陽
(147cm×302cm)

ることを付け加えておきたい。^{?)} □で囲んでいるところが拓本では缺けている部分で、『(康熙)山西通志』により補った。

大元敕賜重修鹽池神廟碑

翰林直學士朝列大夫知

制誥同修

國史臣王緯奉

敕撰

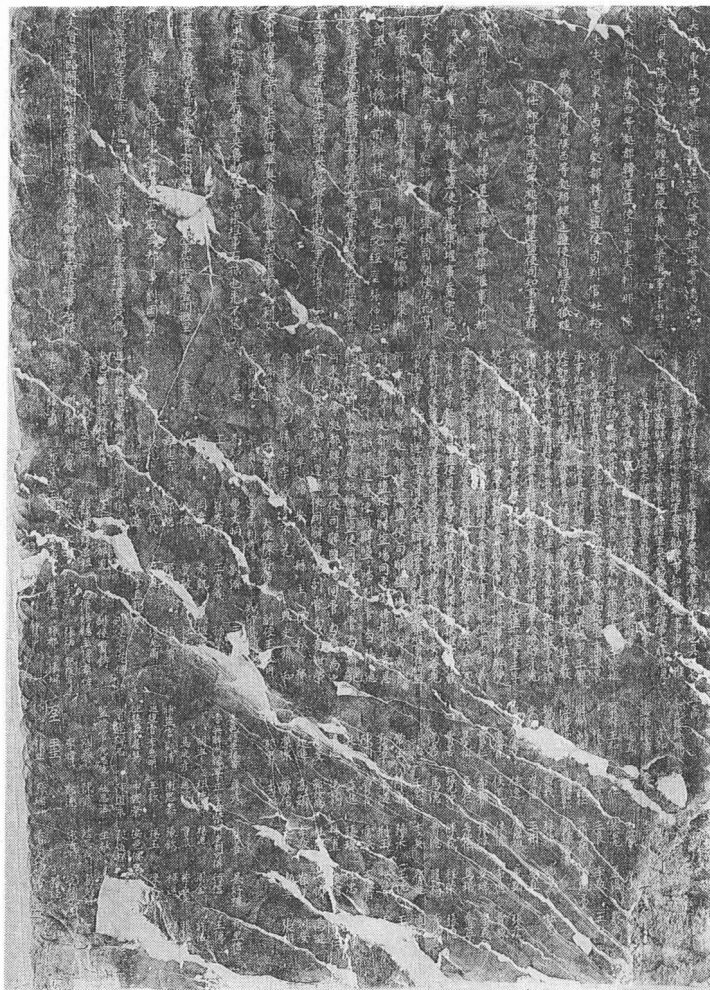
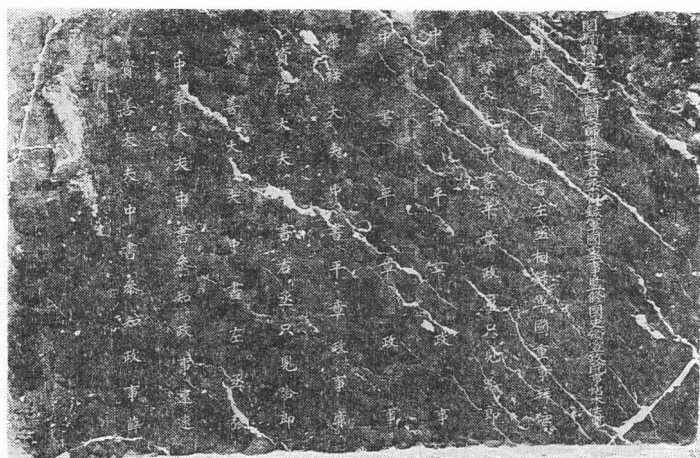
翰林學士承

旨榮錄^大夫知

制誥兼修

國史臣劉賡奉

敕書



圖版4 「大元敕賜重修鹽池神廟碑」碑陰
(147cm×307cm)

奉 敕篆額

翰林學士承

旨金紫光祿大夫上柱國知

制誥兼修

國史韓國公中書平章政事臣李孟

延祐改元春三月癸亥、／

皇帝御嘉禧殿、中書省臣言、陝西都轉運鹽使司重修鹽池神廟成、當書其事于石。／

制曰可。以 命翰林臣緯、恭承／

明詔。竊惟 國家生財有道、裕民有制。其於天地之藏、山澤之利、皆所以佐 國用、厚民生、實經世之遠圖也。

故禹貢之海濱、廣斥厥貢鹽絺。洪範之八政、必先食貨。周制太宰、以九賦斂財賄、九貢致邦國之用。其本蓋有所自矣。

謹按地理志、鹽池在晉之河東、春秋時爲郇瑕氏之地、以其沃饒近鹽、晉人實之。史記猗頓以鹽鹽起、卽其處也。自秦漢魏晉以降、法之禁弛、鹽之盈縮、因革不同。唐大曆十二年、韓滉判度支、奏其池產鹽、請置神祠、始賜號曰寶應靈慶池、

其神曰靈慶公。宋崇寧四年、封池之神、東曰資寶公、西曰惠康公、封澹泉之神曰普濟公、鹽風之神曰薦寶侯。大觀二年、進池神爲王爵、薦寶侯爲成寶公。我 聖朝之開創也、

太宗英文皇帝、百度肇新、丞相臣耶律楚材、以經費爲務、乃薦臣姚行簡爲解鹽使、置司于路村、募亭戶千、爲之商度區畫。自是保聚益繁、商賈益阜、鹺課日益以增、公私以爲便。歲癸丑、

憲宗桓肅皇帝、以／

世祖聖德神功文武皇帝介弟之重、西征大理、盡畀鹽池之利、以餉軍、圖從宜府於京兆、俾右丞臣李德輝領其事。先是、霖潦敗鹽、遣使致禱、併五年之獲、廼建廟于池之北阜、

賜額曰弘濟。後罷從宜府、爲陝西都轉運使司。至元廿九年、改爲陝西都轉運鹽使司、徙置路村、罷解鹽使司。大德三年秋七月、以課羨 制詔、加封資寶王爲永澤資寶王、惠康王爲廣濟惠康王、普濟公曰福源靈慶公、仍賜楮幣百五十緡、

命陝西行中書省、歲五月朔遣官致祭。夫鹽在五行為水、水曰潤下、潤下作鹹。所以供祭祀、備膳羞、資生民之用、蓋不可一日／闕也。昔周使周公閱聘魯、設白黑形鹽、辭不敢饗。此又見禮之重者。前代解鹽、墾畦沃水種之、今則不煩人力而自成、非若青齊瀋瀛漸海牢盆煎煮之勞及蜀井穿鑿之艱也。蓋得／天地之精英、河山之靈秀、潏而爲池、廣袤百里、渟蓄滲漚、凝爲大礬、皚皚漫漫、浩無津涯、璀璨晶明、莫可名狀。役夫萬餘、畚鍤雲集、曾不踰旬、哀如山積、其利甚博、終古不竭。方嵯之凝也、／條山之下有風谷焉、每夏仲月、應候而至、至則吹沙石、摧林木、其聲隆隆、俗謂之鹽南風。又所

謂澹泉者、旁皆斥鹵、惟此甘冽、取鹽之際、炎暑蒸鬱、蠲渴救渴、濯煩滌汗、惟泉是賴、人不告病、噫神矣哉。傳曰、今夫山一卷石之多、及其廣大寶藏興焉、水一勺之多、及其不測貨財殖焉。其以此歟。凡舟車之運、徧梁雍陝洛河東河內之境數千里、皆食其利、會其歲之入、以緡計者二千萬。至大三年、同知陝西都轉運鹽使司事臣焦、都轉運鹽使司副使臣喬宗亮、以神祠歲久、棟宇傾圯、乃與民商議、欲一新之、衆翕然樂爲資助、終更弗果。皇慶二年、前陝西都轉運鹽使臣阿失鐵木兒、同知都轉運鹽使司事臣宋天瑞、西相故廟西墻、卜地爽塏、中締正殿、周阿重簷、翼東西廡、前敞其闕、後營寢室、翬飛矢棘、階阡峻整、宏達靖深、事將訖工。今陝西都轉運鹽使臣完顏德輝、都轉運鹽司副使臣張忽都答、繼至莅職、廼冠大門爲樓、扁曰寶慶、下瞰鹵澤、面對中條、東繚太行、西峙雷首、陰霽朝暮、翕忽變化、千態萬狀、信一方之奇觀也。落成之日、遷永澤資寶王、廣濟惠康王于新廟、葺舊廟以祀成寶公、率僚屬士庶商賈、咸會祠下、鼓舞懽悅、神人於是乎大洽矣。仍以廟碑請于朝、故有是。

命。洪惟聖朝富有天下、際天所覆、互地所載、日月之所照臨、雨露之所霑濡、休養生息、自租賦外、雖以鹽課佐經費、然斂不及民而民自足、所謂國不以利爲利、而以義爲利也。是以天下之民、安其俗、樂其業、漸仁摩義、熙熙皞皞、比隆三代。其視齊管子正鹽筴以興展渠之利、漢東郭咸陽、孔僅幹鹽鐵以歸大農、唐之宰相領鹽鐵以判度支、萬萬不侔矣。方今／

聖人在上、參天地之化育、裁成輔相、宜乎地不愛寶、神相其福、國以饒衍。是用昭崇祀事、加錫封號、作新廟貌、勒之金石、祐我／

皇元億萬年無疆之祚、神亦與享無窮之祀、猗歟盛哉。臣繡拜稽首、而系之詩曰、／乾坤亨毒、孰爲綱維。萬物並育、孰窺端倪。五行爲用、水德稱首。作鹹之利、以資富有。維古郁瑕、地質沃饒。右限大河、南峙中條。實沉之次、／畫野定標。匯而爲池、雲蒸霧歔。結而爲嵒、雪積嵒嶢。殆出神力、民不告勞。自唐歷宋、祀事孔

昭。於皇 聖元、奄有萬國。山川貢珍、／百神效。靈池之産、歲增萬億。大德三禩、封號加錫。皇慶 御極、嘉神之德。廼作新廟、新廟奕。于以揭虔、有嚴禮秩。神人浹和、／用紀威。繄神之休、國用阜康。既富而教、頌聲洋洋。比屋可封、遺風陶唐。於萬斯年、 寶曆無疆。／

至治元年歲在辛酉十二月□□□十有二日辛亥

河東陝西等處都轉運鹽使司臣馬思忽等

二 至元二十七年建立「解鹽司新修鹽池神廟碑」の若干の検討

本章では、一章で釋讀を試みた「新修碑」碑陰の「建置鹽司歷年增課記」（以下「增課記」と略稱）の内容を若干検討し、當時の鹽池行政の問題點を探り、「新修碑」建立の背景の考察を試みる。

（一）鹽司・鹽場の移轉問題

至元二十七年（一二九〇）に書かれた碑陰「增課記」は、撰者書者ともに平陽路詞賦進士の陳元忠である。詞賦進士とは、金で行われた科擧制度のうち、賦・詩・策論の試験によって選拔される進士であり、經義進士と並び漢人向けの科目であった。⁸ 陳元忠は管見の限り他史料にはみえない。碑文全體を讀むと分かるように、そもそも内容自體が風雅なものではないとはいふものの、古典をふまえた表現は極めて少なく、お世辭にもうまい文章とはいひ難い。彼が碑陰の撰文を依頼されたときのこととして、「僕辭するに學術鄙陋にして、且つ典故無きを以てす」と記すが、謙遜どころか、もったもなことをさ感ぜさせられる。碑文の文章から判斷するかぎり、彼はあくまでも鹽池地元における一介の田舎知識人

にすぎなかった。このことはまた、ときに千人近くに及ぶことさえあった金末の進士及第者の水準もうかがわせる。

さて、「増課記」の撰述依頼の部分には、「司事の遷置、鹽課の増益、敢えて述文し以て石背に紀さんことを請う」とあるように、鹽利収入の増益と並んで、鹽司役所の移轉問題が碑文の主題の一つになっている。それは、モンゴル政權のもとで、新たに鹽司が創立された路村（のちの聖惠鎮、運城）と、從來鹽池の中心都市であった解州（解縣）との間の争いである。前章で釋讀を試みた「増課記」の内容は、當然鹽司を路村に置くことに與する立場に立つ。その一方で、解州側の主張を示す碑文が、地方志に著録されている。本節では二つの史料を對照して、至元年間における解鹽使司・解鹽場の移轉問題の顛末を考察する。

鹽池近くの平陽が確實にモンゴル政權の版圖に入つたのは、一二二七年のことである。⁽⁹⁾そしてオゴデイの即位後の一二三〇年、開封へ南遷した金に對する大規模な征討作戰が實行される過程で、補給線の確保のために十路徵收課稅使が華北各地に派遣され、鹽池を含む山西の南西部一帯については平陽府徵收課稅所が設けられた。姚行簡が解鹽使として派遣されたのは恐らくこのときのことである。⁽¹⁰⁾

金の滅亡後、華北支配の再編が行われる中、「丙申の歲」すなわち一二三六年に姚行簡によって新たに解鹽使司が路村に創立される。この年は、舊金領の華北一帯がモンゴル王侯・貴族に所領分割される、いわゆる「丙申年の分撥」の年であることも注意される。さて、「増課記」の記述によれば、鹽司の置かれた場所は、鹽池北側の丘の上、高燥ですがすがしい地であるという。鹽池で働く人々に貴重な飲み水を提供する「啖泉」（李庭撰の碑陽では「淡泉」、「重修碑」では「澹泉」と記す⁽¹¹⁾）からは北二里に離れたところである。また、鹽引を持參した商人に鹽を支給する鹽場は、「啖泉」の東に置かれた。

一方、百年以上の歳月を経た元末の至正年間に聖惠鎮（路村）に初めて城郭を築いたときの記録である「運使那海嘉議

築聖惠鎮新城記」(『山右石刻叢編』卷三九所收)には、鹽司創立時に姚行簡が鹽司の立地計畫を圖示して獻上し、オゴデイの裁可を得たことが記されている。從來の解州に比べ、より合理的な立地條件であることがはっきりと認識されたにちがいない。またここには「乃ち莽を^か夷り、^か榛を^か夷り、解鹽司を池の北澚に立つ。」と記されていて、それまで原野であったところに解鹽司が創立されたことが分かる。⁽¹²⁾從來まで鹽池を掌る役所は解州(解縣)と安邑縣の二カ所に置かれて兩池と呼ばれていたが、このとき史上初めて、解州と安邑縣の間の鹽池の北側に鹽司が置かれることになり、明清以後現在に至るまで、「運城」と呼ばれるようになるまちがここに誕生したのである。

その一方で、新たな鹽司の誕生は、從來鹽池の中心都市であった解州に大きな影響を及ぼした。至元十三年(一二七六)に立てられた「解州知州判廳壁記」(『山右石刻叢編』卷二五所收)には、當時解州が「城市瀟條にして、民は其の生理を闕く」という状況であったことを指摘した上で、知州鄭公の言葉を次のように引いている。

解の郡たること、昔は鹽池の利を恃み、百商往來し、民は以て其の生を樂しむを得、郡は以て其の盛を増すを得。爰に我が朝統一するの後より、西場は置くなく、鹽は□(路?)村に在りて支發すること、其の年を久しくす。⁽¹³⁾

姚行簡の鹽司創立のさいに、鹽池の解州側の鹽場である「西場」が廢止され、それによって解州が鹽池から得られる利益を享受することができなくなっていたのである。⁽¹⁴⁾

「増課記」にみえる、至元七年(一二七〇)の鹽司移轉の議論は、こうした背景から起こったものであろう。その案件は中央政府に持ち込まれ、それに對して、アフマド Ahmad を首班とする中央財務機關である尙書省の劄付が下されている。⁽¹⁵⁾そこでは、尙書省の前身である制國用使司の「元卷」に基づき、鹽司を移轉すべきでない、との戸部の原案が採用される。その理由が、役所建物・倉庫・鹽集積場といった設備が備わっていること、解鹽を食すべき指定された地域への運搬に便であること、という合理性を追求したものだっことは注目される。⁽¹⁶⁾

その後、鹽司・鹽場の解州への移轉問題が再燃したのは、傅士開が陝西都轉運使に就任し、課額の減少した現状の改革に乗り出した、至元二十年（一二八三）のことである。「増課記」の記載によると、鹽法が振るわないのは、鹽盜などが集まってくるような「淵藪」の地に鹽司が置かれているためである、と主張する者がおり、また解州からも鹽司の移轉の請願が行省に出された。その結果、行省の裁可を得て、鹽司は解州に、鹽場は西池（鹽池の解州側）に遷されることになった。

さて、この時の鹽司移轉について、解州の側から述べたのが、王利用撰「復立解州運司碑」（『乾隆』解州全志』（乾隆二十九年刻本）卷一所收、以下「解州碑」と略稱）である。その撰文依頼の部分以降、碑文の終わりまでを引用する。至元乙酉（二十二年（一二八五））、州尹王奉訓（文資品從五品・奉訓大夫）余に懇を致して曰く、「解州は鹽鹺の利を恃み、世よ名郡と爲る。故に豐實軍と曰い、亦た興實軍と曰う。さきごろ主鹽の官、州と隙有り、遂に司を路村に置き、以て閭井蕭條にして、居民鮮少なるを致すこと、今において五紀なり。日や月や、鹽法亦た弛むは、良に司を置く所の村の野處に居るに由る。公私通弊し、課は歲額を失い、詞訟は日ごとに滋んなれば、朝省使を遣わして考會せしむること、積年已まず。行中書省は之れを病み、廉幹の吏を選ぶを思い、委ぬるに大計を以てし、乃ち前經略司經歷吳從仕（文資品從七品・從仕郎）を辟し、以て監權せしむ。洊任の初、弊端を究め、新政を立つるに、首めに復た解州に遷すを以て便と爲す。行省は其の議を允とす。州の正倅、即ち公廨を以て鹽司と爲し、僚屬に禮接すること賓主の若くす。然るに規模制度は、之れが爲に一新す。實に至元癸未（二〇年（一二八三））春二月なり。既にして歲課の羨餘は、啻に倍徙するのみならず。都轉運同知王中順（文資品正四品・中順大夫）、具奏以聞し、乃ち課績は從仕を以て最と爲し、承事郎（文資品正七品）を改授し、解鹽使に充つ。是れより州司・鹽司は、其の便に處るを獲て、畦戸・編戸は、厥の居る攸を負む。擬して豐碑を立て、以て其の事を紀さんとするに、閣下の文に非ざれば、其の始終を揄揚する能わざるなり。」余之れに應じて曰く、「州司は鹽司を非れば、則ち城市集まらず、鹽司は州司を

非れば、則ち歳課増さず。朝廷は人を得て、兩司は乃ち建つ。事既に告成すれば、世よ其の美を濟し、之れを貞珉に勒し、之れを後代に傳うれば、孰か宜からずと曰わん。」是に於いて書す。¹⁹⁾

この碑文は、至元二十年の解州への鹽司移轉を記念して立てられた石碑であり、撰文が依頼されたのは至元二十二年のことである。ここで注目されるのは、「主鹽の官」（＝鹽司）と解州の間に對立があったことを明記し、そのために鹽司が路村に置かれることになったと述べていることである。これは他の史料には一切みえない事實である。そして、先に引いた「解州知州判廳壁記」と同様に、鹽司が路村に置かれたがために解州が寂れてしまったことを指摘する。さらに、鹽法の不振については、鹽司が置かれた路村が「野處」であるためとし、鹽司が「淵藪の地」にあるためであるという主張が「増課記」中に引かれていることと一致する。（356頁釋讀案）そして鹽法の不振から課額が減少し、不正行爲を摘發する訴訟が盛んに起こされて、中央からの會計監査がしきりに行われていたと述べている。

こうした状況の下、改革の必要性を感じていた陝西行中書省によって鹽司の官として起用された從仕郎の吳某の主張に従い、至元二十年二月、行中書省の裁可で鹽司は解州へと移轉することになったとある。そして、その年の鹽利收入が増益したことで、從仕郎の吳某は、中順大夫で都轉運同知の王某の人事評價報告によって成績第一とされ、正七品の承事郎に昇進、解鹽使に任ぜられた。「増課記」に出てくる「鹽使吳恕貫道」は、至元二十年冬に解鹽使になっているので、恐らくこの「吳從仕」と同一人物である。「増課記」においても、鹽引の販賣・鹽の支給を管掌した彼の手腕によって、至元二十年の課額が増額したと述べられている。ただし、吳恕が鹽司の解州移轉を主張したことには全く觸れていない。これは、路村サイドの權益を代表するその記述の立場からすれば、不都合なことなので、沈黙するのは當然のことである。いずれにせよ、これらの記述から吳恕という人物が辣腕の財務官僚であったことを知りうる。その手腕を買われてか、至元二十年より十六年を経た大德三年（一二九九）の時點においても、陝西等處都轉運鹽使司副使として鹽池行政に携わっ

ていたことが碑刻史料（『陝西等處都轉運鹽使司新作孔子廟記』、『山右石刻叢編』卷二八所收）より確認される。鹽池行政はこうした財務官僚によって支えられていたのである。

「増課記」の記述によると、鹽司が解州に、鹽場が西池に移った結果として、車を雇って遠くまで運搬せねばならなくなり、鹽の受給が困難になった、と訴える者があった。陝西行省からの委任で派遣された官による調査がなされ、鹽場を東場（安邑縣側）へと移轉すべしとの回答が得られた。これに疑問を抱いた都轉運使の傅士開が自ら實地調査を行い、鹽場を路村近くのもとの場所に戻したのは、至元二十二年八月のことである。（356頁釋讀案參照）

「解州碑」がいつ立てられたのかは分からないが、少なくとも文章が書かれたのは、撰文を依頼された至元二十二年を大きく下ることはなからう。鹽場の移轉と「解州碑」の撰文のどちらが先なのかは不明だが、いずれにせよ、至元二十二年ころには、鹽司・鹽場の所在をめぐって議論紛々であったことは疑いない。とすると、このような中で書かれた「解州碑」は、鹽司を一度は取り戻すことに成功した解州側が、再び持ち上がった鹽司・鹽場移轉の議論に危機感を抱き、自分たちの權益を守り抜くためにつくった記念碑であったにちがいない。碑文において、鹽利収入の増益は鹽司の解州移轉の賜物であると述べたうえで、解州の州司（州の役所）と鹽司の協力關係を強調して結んでいるのも、まさしくそうした當時の状況を反映するものである。

至元二十二年八月の鹽場移轉の後、吳從仕⁽²⁰⁾が資寶軍（路村）の役所建物に駐在して鹽利収入の出納を掌り、残りの業務を解州にいる副使・判官に任せたと「増課記」は記述する。これは、移轉した鹽場近くの路村を鹽司の出張所としたことを意味する。解州にいる副使・判官に「餘務を任せた」とする「増課記」の記述は、さも解州の役所を輕視するような口ぶりである。そして、至元二十四年（一二八七）に陝^{シヤムス・フツデー}思^ン丁らが解鹽使司の官として着任すると、鹽場こそが重要であるとの觀點から、解州の鹽司が東へ移轉することになったと記されるが、恐らくは路村に移轉したと考えられる。以

後、鹽池を司る役所は何度か改組を繰り返すことになるが、解州に役所が置かれることは二度となかった。こうして至元年間の鹽司・鹽場の立地をめぐる一連の争いは、路村（資寶軍）側の勝利に終わる。⁽²¹⁾

それでは、こうした移轉の議論が持ち上がる背景は一體何だったのであろうか。碑文には直接表れてこないが、役所に働きかけを行う在地の鹽業に携わる人々、特に鹽の販賣から利益を得る商人の存在を想定しうる。一連の移轉の議論は、宋金以來解州において鹽の販賣・流通に携わってきた商人たちと、モンゴル政權のもと鹽司が創立されてから路村に集まった商人たちとの間の、新舊の勢力争いとみることも可能である。^(補1) そのことをうかがわせるのは、「新修碑」碑陰の「増課記」の下にみえる、立碑に關わった人々のリストである。そこには、「店行」「鋪戸」「運鹽戸」といった鹽業にかかわる商人・運輸業者の名前が多數みえている⁽²²⁾（353頁圖版2参照）。それから約三十年後の至治元年（一二九一）に建てられた「重修碑」碑陰には、鹽商の名前が多く載せられているが、聖惠鎮（路村）のそれが百人近くを占めていて壓倒的に多い^(350頁圖版4参照)。なお、「新修碑」にみえる鹽業従事者のうち、「店行」四名、「鋪戸」一名、「運鹽戸」一名のほか、資力のある商人があたると考えられる「零鹽局大使」⁽²³⁾一名を併せた合計七名が、約三十年後の「重修碑」碑陰に、聖惠鎮の「鹽商」として再びその名前を刻されていることを指摘しておく。⁽²⁴⁾

(二) 立碑の立場と背景

前節において明らかにしたように、至元年間には路村と解州の間に鹽司・鹽場の所在をめぐる争いがあった。「新修碑」碑陰の「増課記」は、當然路村側の權益を擁護し、その主張を代辯するものであった。オゴデイ時代に華北の財務關係の職務を任されていた耶律楚材から解鹽使に任命された姚行簡が鹽司を路村に創立したことや、クビライから陝西方面を任された廉希憲・商挺が中統二年（一二六一）に路村を資寶軍と改稱したこと⁽²⁵⁾についての「増課記」の記述は、いずれ

も路村に鹽司があることの正當性や根據を主張する材料として選擇されたものだという事に留意する必要がある。

そうした「増課記」の記述の中でも注目すべきは、鹽司が路村にあるべきとする論據として、至元七年（一二七〇）の尙書省劄付が節略されて引用されていることである。ここでは、尙書戸部が「制國用使司元卷」に依據して鹽司を今のまま動かさないのがよいと立案し、尙書省はその原案通りに劄付を下す、という手順になっている。至元三年（一二六六）に設立された制國用使司を發展させた財務機關であつた尙書省は、ムスリム財務官僚であるアフマド（阿合馬）がその實權を握っており、至元十年（一二七三）まで鹽池はその管轄下にあつた。⁽²⁶⁾一方、「増課記」の書かれた至元二十七年當時は、アフマドに近い關係にあり、ティベット化したウイグル人である可能性が高いとされるサンガ（桑哥）らを中心とした尙書省が財政運営を行つていた時期に合致する。⁽²⁷⁾サンガらの尙書省の政策は、アフマドの制國用使司・尙書省の路線を繼承するものであつた。⁽²⁸⁾この碑文にアフマド時代の尙書省劄付が引かれていることは、そうした文脈で理解すべきなのである。また、碑文にみえる現任の三人の鹽司官が任に就いた至元二十四年（一二八七）春は、サンガらの尙書省設立の時期と一致しており、彼らを鹽司官に任命する人事が、この尙書省設立と連動している可能性は高い。三人の鹽司官のうち、鹽使の陝思丁すなわちシャムス・アッディーン Shams al-Din は、その名前から明らかにムスリム官僚であると考えられるので、サンガらの人脈に連なつていたことも十分に想定しうる。

「増課記」碑文中には、至元二十六年（一二八九）に正月と十一月の二度にわたつて聖旨を奉じて鹽引價格の改定が行われたことが記されている。正月には鹽引の價格が中統鈔十五貫・至元鈔三貫（兩方あわせて中統鈔に換算すると三十貫）と定められ、⁽³⁰⁾さらに十一月には至元鈔十貫（中統鈔に換算すると五十貫）に鹽引價格が改められたのである。このうち後者については、『元史』より關連する史料二つを見いだすことができる。

桑哥言えらく、「國家の經費は既に廣く、歲入は恆に出だす所を償わず、往歲を以て之れを計るに、足らざる者百萬

錠を餘す。尙書省は天下の財穀を鈎考するより、陛下の福を頼み、徴する所を以て之れを補い、未だ嘗て斂は百姓に及ばず。臣恐るらくは自今此の法を用い難し。何となれば則ち倉庫徴すべき者少く、而して盜む者亦た鮮ければなり。臣之れを憂う。臣愚以爲えらく、鹽課每引今直は中統鈔三十貫、宜しく増して一錠と爲すべし、：（中略）：此くの如くなれば、則ち國用支すべきに庶し、臣等罪を免る」と。世祖曰く、「議する所の如く之れを行え」と。（『元史』

卷二〇五、桑哥傳³¹

桑哥言えらく、「初め至元鈔に改め、盡く中統鈔を收めんと欲し、故に天下鹽課をして中統・至元鈔を以て相半ばして官に輸めしむ。今中統鈔は尙お未だ急に斂むべからず。宜しく稅賦をして並びに至元鈔を輸めしめ、商販に中統料鈔有らば、至元鈔に易えて以て行するを聽し、然る後に中統鈔盡くべし」と。之れに従う。（『元史』卷一五、世祖

本紀、至元二十六年閏十月庚辰³²

この二つの史料は、ほぼ同時期のサンガの獻言である。一つ目の史料が鹽引價格を中統鈔一錠（＝五十貫）とするものであり、二つ目の史料が鹽課を中統鈔・至元鈔半々からすべて至元鈔で納めさせることにした措置である。「増課記」にみえる至元二十六年十一月の鹽引價格改定はこのサンガの獻言に基づくものである³³。つまり、當時の鹽池における鹽政は明らかにサンガを中心とする尙書省の主導のもとで行われていたのである。ちなみに、鹽引の販賣が至元鈔で行われるようになったものの、「増課記」碑文中にみえる鹽課のデータがすべて中統鈔換算で記されていることから明らかなように、基幹紙幣はあくまでも中統鈔であったことには注意せねばならない。

「増課記」の記述の中で、もう一點注目すべきなのは、鹽池が安西王の支配下にあった時期についての記述である。至元十年（一二七三）十月にクビライの長子マンガラが安西王に封ぜられて陝西一帯を所領として與えられると王相府が設けられ、鹽池の収入は安西王家に歸することになった。鹽池を含んだ安西王マンガラの所領は、モンケ時代にクビライが

京兆一帯を私領として與えられて以來の枠組みを踏まえたものである。³⁴この後安西王家治下の財政をつかさどったのが、至元十六年（一二七九）まで陝西轉運使の任にあった郭琮であり、「増課記」に「至元十一年已後、巨猾陝西漕司の事を領す」とあるのは、彼を指すにほかならない。至元十五年（一二七八）のマンガラの死後、陝西五路西蜀四川課程屯田事として陝西・四川方面の財政政策の改革を任された安西王相の趙炳は、この郭琮の汚職を摘發しようとしたが、逆に後繼ぎのアーナンダの令旨にかりた郭琮の逆襲にあい、幽閉された擧げ句に殺されてしまった。その後、クビライの逆鱗にふれた郭琮の誅殺によって事件の決着をみることとなった。³⁵注意すべきは、趙炳が陝西方面の財政改革を任されたのは、アフマドの推薦によるということである。『元史』卷一〇、世祖本紀、至元十六年九月庚戌條に、次のような注目すべき記事がみえる。

阿合馬言えらく、「王相府官趙炳云うに、陝西課程は歲ごとに萬九千錠を辦ずるも、所司若し果して心を盡くして措辦すれば、四萬錠を得べしと。」即ち炳に命じて之れを總べしむ。³⁶

この『元史』本紀の記述から、アフマドが安西王家治下における財政運営を問題視していたことがうかがわれる。當時、陝西轉運使が掌る「陝西課程」すなわち稅收の大半が鹽池からの收入によって占められていたから、アフマドの不滿は鹽池の收益にも向けられていたはずである。こうした状況のもと、アフマドは陝西の財務改革を趙炳に委任して收入増加を圖り、それにとまって會計檢査と不正摘發を行おうとしていたのであった。³⁷そもそも、アフマドらの財政運営は基本的に中央による統制の強化を指向するものであった。獨自に管下での任官・徵稅を行い分立の傾向をみせる安西王家に對し、くさびを打ち込もうとしたのがこのときの趙炳派遣だったのである。郭琮を「巨猾」と記し、彼が陝西轉運使にあった時期を鹽池行政の不振期として否定的に捉えた「増課記」の記述には、こうした背景があったのである。³⁸

この事件がきっかけとなり、至元十七年（一二八〇）安西王相府が廢止され、陝西四川行中書省が置かれる。³⁹その結果、

鹽池は陝西四川行中書省―陝西都轉運使司―解鹽使司という管轄系統の下に置かれることになった。事實、「増課記」をみると、これ以降行中書省がしばしば現れていて、鹽司の移轉などでも、その決定の権限は行中書省にあったことがわかる。そして、至元二十四年の尙書省設立後は、尙書省の管下に入り、「増課記」の書かれた至元二十七年に至る。

「増課記」は、課額の増加という鹽政の成功を記念して、至元二十七年當時の解鹽司の官吏と、モンゴル政權になってから新たに鹽司の所在地となった路村（資寶軍）の在地の人々を稱揚する目的で書かれた。そしてそれは、ここまで述べてきたように、中央において尙書省が財務を取り仕切っていた當時の政治状況を色濃く反映するものであった。アフマドやサンガが『元史』姦臣傳に立傳されていることに象徴されるように、クビライ政權下で經濟政策を擔う尙書省の中心にいた彼らの政策は、漢文文獻において惡し様に書かれがちである。この點に照らして考えると、「増課記」という石刻史料は、尙書省による財政運營の成果を示す實例として、きわめて貴重な漢文史料であることが明確になるだろう。

最後に、李庭の撰文にかかる碑陽の「新修碑」碑文について、内容を簡単に紹介するとともに、このときに刻されるに至った経緯について考察しておこう。

撰者の李庭は華州の人。金元交代期の陝西の漢人文化人を代表する人物で、『寓庵集』八卷が傳わる。彼も金末に詞賦進士に及第しているが、碑陰の撰者陳元忠に比べるとはるかに格上の人物と言つてよい。元になってからさしたる官歴を歩むことはなかったが、クビライ政權成立直後、アリクブケとの争いのなか陝西方面で活躍したウイグル人廉希憲や商挺などとのパイプを持ち、彼らのために書いた文章が『寓庵集』に残されている。⁴⁰

「新修碑」碑文では、まず『尙書』洪範の五行説を引いた上で、海鹽・井鹽に比べ人手のかからない解鹽が産出するのは天と神の加護のおかげであることが述べられ、祭祀の必要性を説く。その後、古典にみえる解鹽の記述が引用され、漢代以來の解鹽の沿革が、そして唐代大曆年間國家の手で祠廟が置かれて祭祀が行われるようになってから以後につい

ては祠廟の沿革も記される。最後にモンゴル政權での鹽池神廟建設の緣起についてふれているが、これが碑文の主題である。

一二五三年、時の大カアン・モンケの弟クビライは、南宋攻略の一貫として、四川から雲南・大理侵攻作戦にあたるべく、陝西一帯を私領として賜與された。その時に前線への軍事補給線確保のために京兆に設置されたのが從宜府であった。クビライの與えられた所領内で、最も収益が期待できるのは鹽池であった。「新修碑」によると、折しも長雨が續いたために、鹽利収入が損なわれたが、鹽池の神に祈禱した結果、五年の収益を得たという。この記述は鹽池から多額の収益を得て、軍事經費の調達に成功したことを示唆するものである。その結果として、鹽池の果たした功績を記念して、翌年の一二五四年にモンケの裁可を得て、鹽池神廟が建立されたのである。李庭によって「新修碑」が書かれたのはクビライ即位後のことである。至元二十七年撰の碑陰「増課記」には、「前賢の作る所の鹽池神廟碑銘、二十年未だ石に勒せざれば」と記されていることから、至元年間になってから書かれたことが分かる。それから二十年間も碑に刻されなかった経緯はよく分らない。ただ、碑陰「増課記」の記述内容や、その下に立碑に携わった人々として、解鹽使司關係の官吏とともに、社長・耆老・儒士といった在地の指導者たち、店行・鋪戸・運鹽戸といった商人や鹽業従事者の名前までが刻されていることよりすれば、「新修碑」という碑が、解鹽使司の置かれた路村における官民の協力體制と、それに基づいた鹽政の成功を記念したモニメントとして建てられたものであることは明白である。そうした立碑の意味合いを考えると、時の大カアン・クビライと鹽池との昔からの結びつきを強調する李庭撰「新修碑」碑文は、石に刻するには恰好のものだったと言えるだろう。

おわりに

以上、本稿では、至元二十七年立碑の「新修碑」の紹介と若干の内容検討、——とはいえ、碑陽の分析はまったく十分ではあった——及び延祐元年撰・至治元年立碑にかかる「重修碑」の紹介にとどまった。元代における鹽池と鹽池神廟の歴史においては、後者もまた重要な意味を持った碑であることは明らかである。この「重修碑」を本稿で若干検討した「新修碑」や未紹介のほかの元碑とともに検討し、本稿では十分踏み込むことができなかった、鹽池神廟における國家祭祀や鹽池行政の變遷、鹽商と商業、國家財政といった様々な問題を解明していく必要がある。また、鹽政・祭祀に関する宋金時代からの流れを歴史的にどう理解すべきなのか、元の華北支配の中で鹽池を含む山西省南西部から陝西省南東部にかけての一帶の地域をどのように把握するべきなのかといった、時間・空間上の問題も明らかにせねばならない。これらはすべて今後の課題である。他日の検討を期したい。

注

- (1) 妹尾達彦「鹽池の國家祭祀—唐代河東鹽池・池神廟の誕生とその變遷—」『中國史學』二、一九九二。
- (2) 中谷英雄「鹽池見學記」(『東洋史研究』五—三、一九四〇)、「河東鹽池碑記考」(和歌山縣立桐蔭高等學校社會科研究會紀要二、一九五三)。
- (3) 水野清一・日比野丈夫『山西古蹟志』(京都大學人文科學研究所研究報告、中村印刷、一九五六)。運城・鹽池・鹽池神廟については、一五—一九頁を参照。最近中國において本書の中國語譯版が出版された(孫安邦・李廣治・謝鴻喜譯、山西古籍出版社、一九九三)。
- (4) 前掲注『山西古蹟志』、一三八—九頁注(48)。
- (5) 前掲注『山西古蹟志』、一二四—五頁、及び前掲注(1)妹尾論文、一七八頁参照。碑陽右上部が破損していて、碑文のタイトルが讀めなくなっているが、『山西古蹟志』では「大元敕賜重修鹽池神廟碑」というタイトルを記している。これは篆額に基づいたタイトルである。
- (6) 「重修碑」碑陽・碑陰の下部の拓影は、杉山正明「元朝治下のムスリム」(川床睦夫責任編集『シンポジウム イスラームとモンゴル』中近東文化センター研究会報告一〇、一九八九)二五—三頁に掲載されている。
- (7) この碑側の拓本は、人文科學研究所には將來されていない。幸い、近年當地を訪れた方より寫眞をみせていただくことができたので、こ

に著録しておく。

助工般運人等

解鹽場攢典文衛

玉珍	崔直	周亨	楊正	侯立
張順	程安	謝興	劉義	樊實
趙進	劉信	劉順	段安	崔進
陳義	段德	樊榮	荊玉	張福
張成	張義	侯善	柳德	李進
李德	陳信	□□	□□	□□
趙福	樊玉	荊直	王秀	□□
柳青	柳義	南海	楊成	崔福
陳童	冉義	張福	許德	張□
李忠	李青德	衛石全	李義	□□

(8) 『金史』卷五一、選舉志。

(9) 『金史』卷一七、哀宗紀、正大四年三月條に、「大元兵復下平陽。」とある。

(10) 『元史』卷九四、食貨志。

太宗庚寅年(一二三〇)、始立平陽府徵收課稅所、從實辦課、每鹽四十斤、得銀一兩。癸巳年(一二三三)、撥新降戶一千、命鹽使姚行簡等修理鹽池損壞處所。

(11)

清代の鹽池關係の文獻にみえる、池神廟の東にある「甘泉」のことを指すと考えられる(『河東鹽法志』などにみえる地圖などを参照のこと)。「河東鹽法志」卷八、池廟によると、「甘泉廟」が「池神廟」の前にあることが指摘されていて、なおかつ泉神を宋代に祀って「普濟公」という封號が贈られていることを明記する。とすると、李庭撰の碑陽に「其環池地、鹹滴皆不可井飲。惟兩池中固有淡水、水特甘涼。舊有龍祠、崇寧間封爲普濟公。歲當炎暑、常役萬人取鹽、苟勺飲不繼、則喝死者過半、酌泉飲之、則免於病。聖朝開創、就泉北二里許治鹽司事。」とあることから、「啖(淡)泉」||「甘泉」が成り立つ

ことになる。なお「甘泉」は、宋代の文獻にも登場する(例えば、沈括『夢溪筆談』卷三、辨證)。

(12) 初丙申祀、汾州人姚行簡繪鹽池之圖、□於太祖(宗の誤か)皇帝、上可之、乃交葬夷榛、立解鹽司於池之北濱、曰路邸、命行簡爲鹽使、專掌鹽賦。是時鹽始有課、□□□用也。

(13) 解之爲郡、昔恃鹽池之利、百商往來、民得以樂其生、郡得以增其盛。爰自我朝統一之後、西場弗置、鹽在□(路?)村支發、久其年矣。

(14) このとき、鄭公によって西場が復置されたことが引用箇所(の續きに述べられているが、後述するように、至元二十年に鹽司が解州に移轉したときに、鹽場は西池に遷されてあり、至元十一年から十三年頃に復活したこの西場との關係は不明である。

(15) 至元二十七年に記された碑陰に、至元七年段階の尙書省割付が引用されていること自體が注目に値する。これについては、後述する(二節370頁)。

(16)

制國用使司は、至元三年にムスリムであるアフマドが中心となって設立された財務機關である。ここで言う「元卷」とは、『元史』卷六世祖本紀、至元三年二月乙酉にみえる「以制國用使司條畫諭中外官吏。」とある「條畫」のことを指すと考えられる。地方には行制國用使司という出先機關がつくられ、このとき鹽池もまた制國用使司の管轄下に入った。(『元史』卷九四食貨志、河東鹽法。「至元三年、諭陝西四川、以所辦鹽課赴行制國用使司輸納、鹽引令制國用使司給降。」)制國用使司は至元七年に尙書省に發展したので、鹽池も當然のことながら尙書省の管轄下に入った。鹽池が尙書省(至元九年正月以後は尙書省が中書省を併合し、中書省と稱した)の管下にあったのは、クビライの子マンガラが安西王に封ぜられる至元十年までと考えられる。

(17)

解鹽の流通地域については、「重修碑」に「凡舟車之運、徧梁・雍・陝・洛・河東・河内之境數千里、皆食其利。」と述べられており、陝西・河南・河東の一帯に及ぶことが確認される。このうち河南に關し

では、『元典章』卷二二、戸部八（元刊本四一葉裏）に、中嶽嵩山の麓のまち登封縣に、滄鹽すなわち河北の海鹽を持ち込んで罪に問われたある蒙古軍人の驛口に關する案件が記されており、登封縣より西の河南府路が解鹽の流通地域で、東の汴梁路は河北鹽の流通地域であったことが分かる。一方、『金史』卷四九、食貨志では解鹽の行鹽地域を「河東南北路・陝西東及南京河南府・陝・鄭・唐・鄧・嵩・汝諸州」と述べており、元代の解鹽流通地域は金代のそれを踏襲しているものと考えられる。

(18) 至元七年、爲移鹽司事、尙書省劄付、戸部照得、制國用使司元卷内、省部公議得、據解鹽司、既是路村設置三十餘年、廩宇・倉庫・料堆俱備、又便於食鹽地面、依舊不動、似爲相應。呈奉尙書省劄付、依准所擬。

(19) 至元乙酉、州尹王奉訓致懇於余曰、「解州恃鹽之利、世爲名郡。故曰鹽實軍、亦曰興實軍。曩者主鹽之官、與州有隙、遂置司於路村、以致閭井蕭條、居民鮮少、於今五紀矣。日居月諸、鹽法亦弛、良由所置司村居野處、公私通弊、課失歲額、詞訟日滋、朝省遣使考會、積年不已。行中書省病之、思選廉幹吏、委以大計、乃辟前經略司經歷吳從仕、以監榷焉。洎任之初、究弊源、立新政、首以復還解州爲便。行省允其議。州之正倅、即以公廨爲鹽司、禮接僚屬若賓主。然規模制度、爲之一新。實至元癸未春二月也。既而歲課羨餘、不啻倍徙。都轉運同知王中順、具奏以聞、乃課績以從仕爲最、改授承事郎、充解鹽使。自是州司・鹽司、獲處其便、畦戶・編戶、爰厥攸居。擬立鹽碑、以紀其事、非閣下之文、不能揄揚其始終也。」余應之曰、「州司非鹽司、則城市不集、鹽司非州司、則歲課不增。朝廷得人、兩司乃建。事既告成、世濟其美、勸之貞珉、傳之後代、孰曰不宜。」於是乎書。

(20) この「吳從仕」が、「増課記」の吳恕（貫道）、「解州碑」の吳從仕と同一人物であるかどうかは不明である。

(21) この後、至元二十九年（一二九二）に解鹽使司が廢止され、陝西方面

の財務全般をも取り仕切る陝西都轉運鹽使司が、解鹽を管掌する役所として置かれたが、その所在地は路村であった（30頁「重修碑」録文参照）。

(22) 倉庫業・旅館業などを意味する「店」や同業者の組合を意味する「行」などは元代以前から漢文文獻に散見するが、「店行」という呼び名の用例は寡聞にして未見である。坐商を意味する「舖戶」と並置され、その前に列擧されていることよりすれば、路村を根據地として各地に鹽を販賣しに出掛けて行く有力な商人を指すと考えることが可能である。この推測は、本碑において確認できる「店行」の名二十一人のうち四人の名前が、約三十年後の「重修碑」碑陰の聖惠鎮の鹽商としてもみえることから裏付けられる。（後掲注（24））ただ、彼らが鹽商であることは分かっても、「店行」という語をどう解釋すべきかは分からない。さしあたり、これ以上の憶測は避けておきたい。

(23) 零鹽局は典籍史料にはみえず、よく分からないが、常平鹽局に比定できる可能性が高い。常平鹽局は、至元二十二年（一二八五）十二月に設立された。これは、アフマドやサンガラの財務官僚に連なる人脈にあった盧世榮の獻策にかかるようである。貧民にまで鹽が行き渡るように發行鹽引のうちの三分の一を各地に設立した常平鹽局に割り當て、官が販賣するシステムである。この制度で特徴的なのは、貧民に鹽を賣るために、一斤からの小口賣りを行うことである。少量の鹽を意味する名前を持つ「零鹽局」は、この点でも、常平鹽局であることを想起させる。また、鹽局官は近くの資力のある商人の中から選ばれたという。「新修碑」碑陰の零鹽局大使・毛柔克は、約三十年後の「重修碑」では、聖惠鎮の鹽商として現れる。恐らく、有力な鹽商として、零鹽局大使に任ぜられていたのであろう。常平鹽局に關する史料は、至元二十二年の設立時のものは條畫なども含め残っているが（『元史』卷二三、世祖本紀、至元二十二年十二月甲辰朔、同卷二〇五、盧世榮傳、『元典章』卷二二・一五葉表、一六葉表、戸部八、鹽

(課)、その後どうなったのかは分かっていないので、この「新修碑」碑陰にみえる「零鹽局」は、その實施例の一つの材料となりうるのではなからうか。

- (24) 「零鹽局大使」が毛柔克、「店行」は賈克仁・李英・馬德・康寧の四名、「鋪戶」が翟福、「運鹽戶」が荊玉である。「新修碑」碑陰の「店行」については、前掲注(22)。

- (25) 今主上建元之二年、康商二相行陝西五路西蜀四川中書省事、有檄爲鹽司辦課大處、改稱資寶庫。

- (26) 中統二年(一二六二)とは前年の秋にクビライ側のカダアンとカプチュがアリクブケ派のアラムダールを甘肅で破り、クビライとアリクブケの争いの間で揺らいでいた陝西・四川方面の確保に成功した段階にあたる。この戦いに際して、鹽池が後方補給線への供給源として機能し貢献していたことをはつきりと示す記事である。

- (27) 前掲註(16)を参照。

- (28) クビライ政權において、經濟力・情報力を持ったムスリム商人勢力を積極的に登用し、財政運営・經濟政策を擔わせたことについては、杉山正明『クビライの挑戦 モンゴル海上帝國への道』(朝日新聞社、一九九五)を参照。登用されたムスリム財務官僚が取り仕切る財務・經濟の専門機關と位置づけられるのが制國用使司(尙書省であった)。

- (29) 『元史』卷一四、世祖本紀、至元二十四年閏二月乙丑。

麥朮丁言、「自制國用使司改尙書省、頗有成效、今仍分兩省爲便。」詔從之、各設官六員。其尙書、以桑哥・鐵木兒平章政事、阿魯渾撒里右丞、葉李左丞、馬紹參知政事、餘一員議選回人充。中書、宜設丞相二員・平章政事二員・參知政事二員。

- (30) 前注参照。

- (31) 中統鈔と至元鈔の半々で鹽課を納めさせるようにする措置は、至元二十四年(一二八七)三月の至元鈔發行にともなうものであり、當時の鹽引價格は中統鈔十貫・至元鈔二貫(中統鈔換算で二十貫)であった

(『元典章』卷二〇、戶部六、元刊本三葉裏)。これが、至元二十六年正月に至って中統鈔換算で三十貫まで引き上げられたのである。

- (32) 桑哥言「國家經費既廣、歲入恆不償所出、以往歲計之、不足者餘百萬錠。自尙書省鈎考天下財穀、賴陛下福、以所徵補之、未嘗斂及百姓。臣恐自今難用此法矣。何則倉庫可徵者少、而盜者亦鮮矣。臣憂之。臣愚以爲鹽課每引今直中統鈔三十貫、宜增爲一錠。:(中略):如此、則國用庶可支、臣等免於罪矣。」世祖曰、「如所議行之。」

- (33) 桑哥言、「初改至元鈔、欲盡收中統鈔、故令天下鹽課以中統・至元鈔相半輸官。今中統鈔尚未可急斂、宜令稅賦並輸至元鈔、商販有中統料鈔、聽易至元鈔以行、然後中統鈔可盡。」從之。

- (34) 鹽引の公定價格については、前田直典「元朝時代に於ける紙幣の價值變動」『歴史學研究』一二六、一九四七初出、『元朝史の研究』東京大學出版會、一九七三所收。

- (35) 松田孝一「元朝期の分封制—安西王の事例を中心として—」(『史學雜誌』八八—八、一九七八)。

- (36) 『元史』卷一六三、趙炳傳、蘇天爵『國朝名臣事略』卷一一に引く商挺墓碑および墓誌、姚燾『牧庵集』卷二三「有元故少中大夫淮安路總管兼府尹兼管內勸農事高公神道碑」(高良弼神道碑)など。趙炳は至元十六年九月に安西王相兼陝西五路西蜀四川課程屯田事に起用された(趙炳傳及び次注本紀を参照)。

- (37) 阿合馬言、「王相府官趙炳云、陝西課程歲辦萬九千錠、所司若果盡心措辦、可得四萬錠。」即命炳總之。

- (38) 『元史』卷一〇、至元十六年十一月乙卯趙炳言、陝西運司郭同知・王相府郎中令郭叔雲盜用官錢。敕、尙書充速忽・侍御史郭祐檢覈之。

- (39) 「增課記」の至元二十年の鹽課額の記載に、「歲終輸官課鈔二萬三千三十五錠、較於法弊之季、增羨七千餘錠。」とあり、「法弊之季」すなわち郭琮が陝西轉運使の任にあったこのころの鹽課額はだいたい一

萬六千錠ということになる。「増課記」に「且陝西所統財賦、鹽課獨輸其七。」とあるように、鹽池からの収入が陝西の財政収入の多くを占めていたことから考えて、前掲注(36)の『元史』本紀にみえる「陝西課程」の額「萬九千錠」は、ほぼ納得のいく數字である。

(39) 前田直典「元朝行省の成立過程」(『史學雜誌』五六一六、一九四五初出、前掲注(33))『元朝史の研究』所収。

(40) 李庭の事跡については、『寓庵集』(繆荃孫『藕香零拾』本)巻末に付せられた王博文「故諮議李公墓碣銘并序」を参照。

(41) 碑文にみえる從宜府を管掌した李公とは、李德輝を指す。從宜府については、姚燧『牧庵集』卷三〇「李忠宣公行狀」(李德輝行狀)、同卷一五「中書左丞姚文獻公神道碑」(姚樞神道碑)及び至治元年に建てられた重修碑(一章四頁の録文参照)などを参照。それらによれ

ば、四川での軍糧調達の際に、商人を利用して穀物を納入させ、代價として交鈔とともに鹽券すなわち鹽引が支給されたことが分かる。

(補1) 「新修碑」によると、「丞相臣耶律楚材、以經費爲務、乃薦臣姚行簡爲解鹽使、置司于路村、募亭戶千、爲之商度區畫。自是保聚益繁、商賈益阜、鹽課日益以增、公私以爲便。」(四頁録文参照)とあって、姚行簡によって解鹽司が路村に創設された際に、鹽の生産に従事する亭戸が新たに募られ、多くの商人が集まるようになったことを述べている。

(附記) 本稿は平成十一年度科學研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。